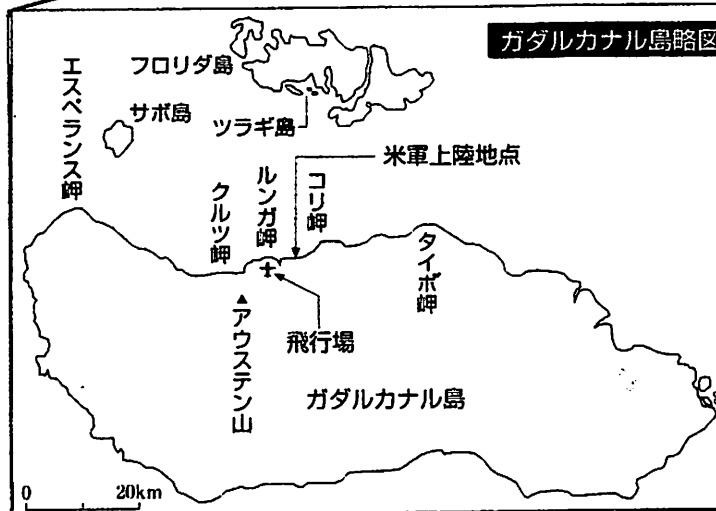
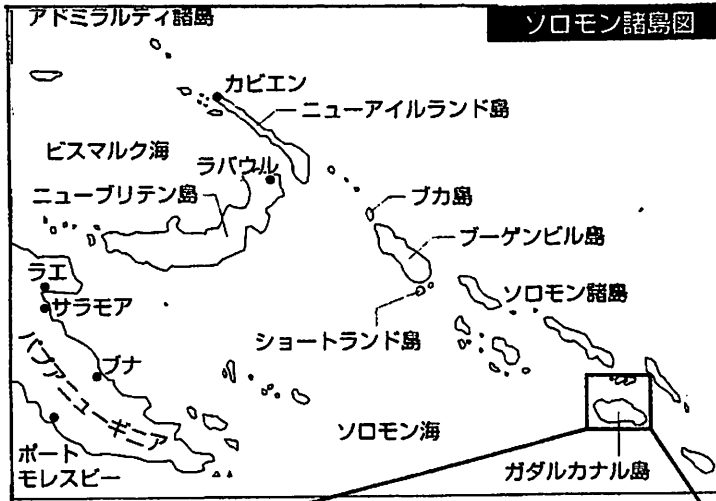


●「ガダルカナルは、たんなる島の名前ではない。それは帝国陸軍の墓地の名である」(伊藤正徳)



▽昭和17年8月7日 米軍が上陸

たった一つの島をめぐる 半年間の攻防
それも一つの飛行場の争奪戦が
太平洋戦争の大きな分岐点になった

●大本営は18年2月9日、ガ島撤退を「転進」と発表した

▽「勝った勝った」の威勢のいい発表ばかり

国民は ミッドウェー敗戦(17年6月5日)も知らない

▽初めて聞く「転進」に 漠然とした不安

「転進」は やがて「退却 敗走」を意味すると...

▽ガ島に 逐次 投入した兵力は 33,600人

戦死8,200人 戦病死11,000人

ほとんどが 餓死 マラリア アミーバ赤痢に

ガダルカナル(Gudalcanal)

東京から南へ5,500^{km}。東西167^{km}、南北52^{km}。四国の三分の一ほどで、全島ほとんどジャングルにおおわれたソロモン諸島南東部にある火山島。

スペインの冒険家が1567年、栄華を謳われた古代イスラエル王国ソロモン大王(紀元前961~922)の金塊を求め、ペルーを船出して、2カ月半ほどして辿り着いた島々。金塊は見つからなかったがソロモン諸島と名付けられた。英国の委任統治領で、オーストラリア海軍が管理。4,000人ほどの島民が海岸に住み、昭和53年独立。ソロモン諸島政府の首都が置かれている。

伊藤 正徳(いとう・まさのり)

明治22(1889)~昭和37(1962)茨城県生まれ。軍事評論家。時事新報に入りロンドン特派員。ワシントン会議(大正10年)に特派され、日英同盟廃棄をスクープ。昭和4年編集局長。戦後、共同通信理事長。著に「大海軍を想う」「帝国陸軍の最期」

大本営発表(昭和18年2月9日)

帝国陸海軍部隊はニューギニア、ソロモン諸島方面で「戦略的根拠地」を設定中で、それが「概ねうまくいっている」とした後、こう発表した。

「右掩護部隊としてニューギニアのブナ付近に挺身せる部隊は寡兵克く敵の執拗なる反撃を撃攘しつつありしが其の任務を終了せしに依り一月下旬他に転進せしめられたり、同じく掩護部隊としてソロモン諸島のガダルカナル島に作戦中の部隊は昨年八月以降引続き上陸せる敵軍を同島の一角に圧迫し激戦敢闘克く敵戦力を撃摧しつつありしが其の目的を達

▽太平洋戦争で 最も悲惨な 戦場の一つ
国力のない日本が
果てしない消耗戦に 引きずり込まれる始まり

●村上兵衛さんが「初めて戦争、国家というものと鼻を突き合わせた」

▽陸士在学中(昭和18年3月) 戦術教官として
赴任して来た ガ島帰り参謀親泊朝省少佐は
いきなり「ガ島は餓島だ」

「物凄い戦いだよ」

「これまでの戦術常識を超えた、悲惨な、冷酷な戦いだ。みんな飢えちよる。君ら信じられるか？ 二十歳そこそこの現役の兵隊の足が、こんなに細く」と指を丸めて輪を作って見せる。「痩せさらばえて…、それでも銃をとって戦っておる。飯盒一杯の人肉が、十円で売り買いされているという話も聞いた。敵のものか、味方のものか、それは言わん。余りの砲爆撃の凄さに、発狂した中隊長もおる。近頃の士官学校では、どんな教育をしておるのだ、そんな声も聞いた。俺が柄にもなく、ここに送り込まれたのも、それとも多少関係があるのかも知れん」

●陸軍はガ島戦で負けてもなお、対ソ戦の研究ばかり

▽教育総監部が「ア号教育」
戦闘方法を 対米戦主体に切り替えるよう
指令を出したのは 18年8月だった
▽昭和天皇は 陸大卒業式(18年11月30日)で
「対米戦苛烈な今日、依然として
対ソ戦研究ばかりをしているのはなぜか？」

●ガダルカナルの敗因は、まず情報の軽視

▽敵兵力を過小評価したため 兵力の逐次投入
そして 何よりも 武器弾薬どころか
食べるものもなくなった 補給の途絶
▽全ては「ノモンハン(昭和14年夏)の繰り返し」だった
日本陸軍の 構造的な欠陥体質
「敵を知らず 己れを知らず」
「戦訓に学ばず 戦訓を生かそうとしない」

成せるに依り二月上旬同島を撤し他に転進せしめられたり、我は終始敵に強圧を加え之を摺伏せしめたる結果両方面とも掩護部隊の転進は極めて整齊確実に行はれたり」

村上 兵衛(むらかみ ひょうえ)

大正12(1923)～平成15(2003) 島根県生まれ。陸軍少尉。近衛歩兵第6連隊旗手。戦後、昭和50年東大独文科卒。出版社勤務を経て評論、著作活動。著に「桜と剣」「守城の人」「国家なき日本」

親泊は敗戦後自決した

9月3日、中佐に昇進し大本営参謀になっていた親泊は、奥さんと2児を道連れに自決した。遺書には「ガ島で死すべかりし命を、今宵断ちます」

沖縄出身の親泊は、サイパン島玉碎(19年7月)の民間人に沖縄出身が多く、沖縄戦(20年4月～)でも、大勢を巻き添えにしたことに責任を感じていた。

泥縄式の対米戦闘訓練

昭和19年3月陸士を卒業した村上さんは、歩兵学校(千葉)に幹部教育第1号として3ヵ月間送り込まれた。昼間は眠って、演習はもっぱら夜。上空に敵機が乱舞しシャワーのように銃砲火を浴びせて来る。日本の兵隊は、もう昼間ではまともな戦争は出来ない状況に追い込まれていた。

まず闇夜に目を慣らす訓練。次が最初から最後までひたすら這いずり回る。姿勢を高くしていたら、すぐやられてしまう。そして停止した時は、必ず穴を掘って潜り込むモグラ戦法。戦車に爆薬を投げ込む攻撃は赤旗を持って走ってくる兵隊を目標に。「とにかく、原始的の一語に尽きた」

●何で、こんな南海の孤島が決戦場になったのか？

- ▽海軍は 米軍が反攻して来るとすれば
オーストラリアを 基地にすると考えた
- ▽豪洲攻撃の基地に 昭和17年1月23日
陸軍の協力を得て ラバウル(ニューブリテン島)と
カピエン(ニューアイルランド島)を占領した

ラバウル

大艦隊を収容できる良港と2つの飛行場があり、昭和17年4月第25航空戦隊が進出。以後、19年2月20日に引き揚げるまでの2年間、「さらばラバウルよ また来るまでは」(ラバウル唄)と歌われたように、日本海軍航空隊の最南端基地に。

- ▽3月8日 ラエ サラモア(ニューギニア)に上陸
20日 ブーゲンビル島北端のプカ島
南端のショートランド島を占領
5月3日には ツラギ島(ブーゲンビル島)を占領し
水上機基地 建設にかかった
- ▽米軍は 豪州増援に 爆撃機を送り込んできた
- ▽ハワイからの 中継基地になっている
フィジー サモア諸島を 攻略することに
ミッドウェー作戦終了後 7月中旬の予定で
5月18日 第17軍(師団長 百武晴吉中将)を編成
- ▽ラバウル航空隊が 航空作戦を進めるには
ソロモン諸島に 前進基地が 必要だった
- ▽ガダルカナル北部 ルンガ川東方に 平地を発見
8月上旬を目標に 飛行場を建設することに

●ミッドウェー海戦(6月5日)で、主力空母4隻を失った

- ▽海軍は 嚴重な箝口令を敷いて 敗戦を隠した
- ▽陸軍には 翌6日 服部卓四郎(師団長)を招き
フィジー・サモア作戦中止を 伝えた
- ▽参謀本部も 知らせたのは
総長 次長 作戦部長 作戦課員だけ
陸軍省にも 情報部にも 知らせなかった
- ▽東条英機首相(閣議)も しばらくは 知らなかった
- ▽マイナス情報は 全員が 共有してこそ
次の対策も 機敏に 立てられるのだが…

●本当は、今後の戦略を根本的に検討すべきだった

…… ノモンハン事件 ……
昭和14年5月から8月にかけて、満州西北部の外蒙国境ノモンハンでの国境紛争。関東軍はソ連軍の戦車、重砲に圧倒され、動員兵力6万のうち戦死8千、戦傷・不明など1万2千人と、日本陸軍始まって以来の大敗を喫した。

百武 晴吉(ひやくたけ・はるよし)

明治21(1888)～昭和22(1947)佐賀県生まれ。陸軍中将。第8師団長、通信兵監を経て昭和17年第17軍司令官となりガ島戦を指揮した。兄三郎、源吾は海軍大将

服部 卓四郎(はっとり・たくしろう)

明治34(1901)～昭和35(1960)山形県生まれ。陸軍大佐。昭和14年関東軍作戦主任参謀。15年参謀本部作戦班長になり、16年作戦課長。17年陸相秘書官に転出。18年再び作戦課長に就任し陸軍主要作戦を立案、指導した。戦後復員局資料整理課長として戦史資料整理に当たった

東条 英機(とうじょう・ひでき)

明治17(1884)～昭和23(1948)東京生まれ。陸軍大将。関東軍参謀長を経て昭和13年陸軍次官。15年第2次近衛内閣陸相となり中国撤兵に反対。16年10月首相。陸相、内相を兼務し対米英開戦。憲兵政治、翼賛選挙により独裁体制を固め、戦局悪化で19年には参謀総長も兼務したが、サイパン陥落で7月総辞職。戦後、拳銃自殺を図り未遂、A級戦犯で絞首刑

「縄張り主義の悲劇」

杉田一次中佐(すぎた ひとし)は「当座は全く知らされず、九月になってようやく知った有様だ。ミッドウェーの、あれだけの敗北を知らされていたら、かなり事情が変わったと思う。作戦計画の大本を練るべき大本営の者が、こんな大損

- ▽中部太平洋の 制空権 制海権が 不安定に
 - ・延び切った戦線は そのままでいいのか
 - ・南太平洋の戦略拠点 は ラバウルで止めるのか
 - ガダルカナルまで 出て行ってもいいのか

▽井本熊男中佐(参謀本部参謀)は
「それが行えるような陸海軍関係ではなかった」

▽日露戦争以来 陸軍は大陸 海軍は太平洋
分担を決め ばらばらに 戦ってきたのが実情

▽陸海軍協同作戦は いつも 妥協の産物

▽開戦前 ラバウル攻略に 陸軍部隊の派遣要請に
塚田攻(参謀長)は 最初 反対した

「絶海の孤島に陸兵を出すことは、海の中に塩
を撒くようなものだ。補給上不可能だ」

▽結局 応じたのは マレー・シンガポール作戦に
海軍航空隊の支援が 必要になり その交換条件

▽孤島の維持 補給が続くかどうかは
制空権 制海権に 依存するのだから

米軍が ガ島に上陸してきた時
この条件を 厳密に 吟味 検討すべきだった

●海軍は、ガ島に予定通り飛行場建設にかかった

▽7月6日 設営隊2,571人 陸戦隊247人が上陸
ヤシ林を 切り開いていったが…

▽米軍は 7月2日「対日反攻計画」を 決定していた

▽ニミッツ(米海軍参謀長)は

ガ島に 日本航空部隊が 進出してくれば
作戦に 重大な支障を来すと 作戦目標に

「ガ島飛行場攻略」を加え 作戦開始を8月7日に

▽日本は 米軍の本格的反攻は「18年以降」

「今後採ルヘキ戦争指導ノ大綱」

昭和17年3月7日、大本営政府連絡会議で決定
したが、米英軍の反攻については「大規模攻勢
ヲ企図シ得ベキ時機ハ概ネ昭和十八年以降ナル
ベシ」としていた。問題なのはミッドウェー
で敗戦しても、この判断を修正しなかった。

▽戦略情報面の判断ミスは 致命的だった

米軍が ガ島に上陸して来ても

せいぜい 飛行場破壊か 偵察上陸だろうと
軽く見ることに つなかってしまった

害も知らずに「今後の情勢判断」などを
研究させられていたのだから、陸海軍
相互の秘密主義がどれだけ戦争全体の
遂行を妨げていたかわからない」

杉田 一次(けだ・いちじ)

明治37(1904)～平成5(1993) 奈良県生
まれ。陸軍大佐。米国駐在武官補佐官、
英国駐在を経て昭和18年参謀本部米英
情報課長。19年作戦課作戦班長。戦後自
衛隊陸将。35年統合幕僚会議議長

井本 熊男(いもと・くまお)

明治36(1903)～平成12(2000) 山口県生
まれ。陸軍大佐。昭和11年参謀本部参謀
となり、陸相秘書官を経て20年第2総軍
作戦課長。戦後自衛隊陸将、幹部学校長

塚田 攻(つかだ・おむ)

明治19(1886)～昭和17(1942) 茨城県生
まれ。陸軍大将。昭和15年参謀次長とな
り、太平洋戦争の南方作戦を立案。開戦
後、南方総軍参謀長。第12軍司令官在任
中、中国で飛行機事故により殉職

米軍の「対日反攻計画」

米統合幕僚会議は、「ウォッチ・タワ
ー作戦」(望楼作戦)を決定した。ニュ
ープリテン島からニューアイルラン
ド島と、島伝いに、陸海空一体の水陸
両用作戦を進め、最終的には、比島か
ら日本本土を目指そうとした。

作戦兵力は海兵隊1個師団1万9千人
で、空母3隻、戦艦1隻、巡洋艦14隻(麟
82隻)、戦闘機126機、爆撃機73機。作戦
開始は8月1日を予定していた。

ニミッツ(Chester Nimitz)

1885～1966 米海軍元帥。昭和16年12月
太平洋艦隊長官に就任、陸軍のマッカー
サーと共に対日作戦全般を指揮した

- 8月5日、長さ800㍎、幅60㍎の滑走路が完成した
 - ▽ラバウル航空隊は 航空部隊進出を要請された時
なぜ すぐ 派遣しなかったのか
 - ▽それまでの戦闘で 25機を失っていた
 - ▽遠隔地のため 機材 人員補充が 思うに任せず
出撃可能機数が 30機を上回ることはなく
ガ島に 兵力を割く余裕は なかった
 - ▽ラバウルから ガ島までは 1,030㍎。
ゼロ戦(零艦上戦闘機)の 航続距離2,200㍎。いっぱい
ガ島上空で戦えるのは せいぜい 15分だった
 - ▽ラバウルーガ島間に 中継基地が必要だった

- 最前線に基地を作るのに、余りにも不用心だった
 - ▽設営隊を守る 海軍陸戦隊は 実力1個中隊
小口径の旧式山砲2門 高射砲6門 機関銃3挺
…… 攻撃重視に対し、防備の関心は薄かった ……
日本の陸海軍は常に作戦の都合優先。作戦課
には、課長以下恩賜の軍刀組を並べ、発言力が
圧倒的に強いことに原因があった。軍令部作
戦課が「ガ島に飛行場が必要だ」と言えば、施
設担当課は少々無理でも設営隊など手配をす
る。しかし防備はいつも後回しで、滑走路は出
来ても、防備施設は何も出来ていないことに。

- 第17軍は、ポートモレスビー攻略に乗り出していた
 - ▽海路攻略しようとして 珊瑚海海戦(5月7日)で中止
今度は 第17軍を 陸路攻略に向けたら…
 - ▽オーエン・スタンレー山脈(縦4,100㍎)を越え
未開のジャングルの中を モレスビーまで360㍎。
 - ▽参謀本部は 第17軍に 調査研究を命じ
その結果を見て 実施を 判断することに
 - ▽ところが 7月11日 第17軍に攻略命令
作戦指導に来た 辻政信中佐(機輜)が
「大本営は、すでに陸路攻略を決定した」
 - ▽南海支隊が 21日 ブナ(東ニューギニア州)に上陸
補給のメドのない ニューギニア戦の始まり
投入兵力14万 11万人以上が 白骨化した
 - ▽辻の 専断命令だった 25日 服部(機輜)名で
「作戦研究の結果はどうなったか」 照会電報

「日本はブルドーザーに負けた」

設営隊はシャベルにツルハシ、モッコ。もっぱら人力で滑走路完成に1ヵ月かかったが、占領後1週間でカマゴコ型バラック兵舎が建つよりも早く、米軍機が飛び上がるのを見て、日本側は「神業だ」と驚嘆したという。ブルドーザーの威力は、海軍陸戦隊が16年12月23日ウエーク島を占領した時、中央に報告されていた。飛行場修理に捕虜300人の労働を命じると、米軍隊長は「3人で十分だ」と答え、大型自動車に機械がついたようなものを動かして、1日で直してしまった。報告はあっても、日本の工業力では手が回らない。工業力の差で、いち早く飛行場を確保、8月20日には戦闘機19機、急降下爆撃機12機が進出、ガ島制空権を握ったことが米軍勝因に。

「ヘンダーソン飛行場」

米軍は、ミッドウェー海戦で戦死した海兵隊少佐の名をとって命名し、戦後もそのまま「ヘンダーソン空港」と言われていたが、平成15年、首都の地名から「ホラニア国際空港」と改名された。日本のODA資金(政府開発援助)で空港整備をしたので、ソロモン諸島政府の対日配慮と言われる。

辻 政信(つじ・まさのぶ)

明治35(1902)～? 石川県生まれ。陸軍大佐。昭和12年関東軍参謀となり、ノモンハン事件で強硬論を主張。16年第25軍参謀、17年参謀本部作戦班長。マレー上陸、シンガポール、ガダルカナル作戦を指導。第18方面軍参謀で終戦を迎え、戦犯逮捕を避けるため僧侶に変装して逃亡を続け23年帰国。27年衆院議員。34年参院議員。36年に東南アジア視察中、ラオスで消息を断ち、43年死亡宣告

▽第17軍は モレスビー作戦に 動いていたため
ガ島に 応急派兵の兵力がなく 対応の遅れに

●米軍作戦は8月7日未明、ツラギ砲爆撃で始まった

▽午前4時20分「敵猛爆中」

6時10分「敵兵力大、最後ノ一兵迄守ル

武運長久ヲ祈ル」を最後に 通信は途絶した

▽ガ島では 午前7時 猛烈な艦砲射撃

海は 戦艦 空母など 大艦隊で埋まっていた

食糧も何もかも 放り出し ジャングルへ

▽31隻の輸送船に分乗した 第1海兵師団

1万9千人は 全く抵抗を受けずに 飛行場を占領

●ラバウル航空隊が攻撃に向かったが…

▽一式陸攻27機 ゼロ戦18機

前日 到着したばかりの 九九式艦爆9機

▽午前10時半頃 ガ島上空に

輸送船団が 兵員 物資を 揚陸中だったのに

ほったらかしにして 軍艦の攻撃に熱中

▽空中戦で 12機撃墜 駆逐艦2隻を大破させたが

陸攻5機 ゼロ戦2機を失い 艦爆隊は

4機が撃墜され 5機が不時着水 初日で全滅した

▽翌日の攻撃でも 陸攻18機 ゼロ戦2機が還らず

ラバウル航空隊は 航空兵力の大半を 失った

▽米軍の空戦能力も 向上していたが

ガ島に着くのに3時間 中継基地のない弱み

●ガ島戦、最初にして最大の逸機

▽8日夜 第8艦隊(司令 三川軍一中将)は

重巡5隻 軽巡2隻で ルンガ泊地に向かった

▽途中 サボ島沖で 米豪連合艦隊と遭遇

午後11時31分 三川は「全軍突撃」を命令

44分 砲撃 雷撃を開始 戦闘33分で

重巡4隻撃沈 重巡1隻 駆逐艦2隻を大破炎上

▽海戦(第1ソロモン海戦)は 大勝利だったが…

三川は 9日午前零時23分「全軍引き揚げ」

▽作戦命令には「為シ得ル限り、夜間、

敵輸送船団ノ泊地ニ殺到、コレヲ撃滅セントス」

▽ルンガ沖 23隻の輸送船には

戦車 重火器 食糧 弾薬が 積まれたままだった

弱小軍団だった第17軍

軍は普通3個師団くらいで編成されるが、第17軍に師団はなく、少将を長とする連隊、旅団規模の支隊が3つあるだけ。実力1個師団ちょっとの戦力で、陸軍は米軍を甘く見ていた。

オーストラリア海軍の情報網

広大な海岸線を守るため、開戦前からニューギニアやソロモン諸島に64カ所の沿岸監視ステーションを設置していた。ガ島でも無線機を持った6人のオーストラリア人が島民を使って情報収集に当たっていた。

ブーゲンビル島では、ラバウル航空隊が出撃するたびに「日本機何機、どの方向に向かう」と通報、米軍は予め万全の迎撃態勢をとっていた。

海軍の「艦隊決戦主義」が災い

日頃、大型艦ばかりを攻撃目標に訓練している。攻撃命令には「攻撃目標船団マタハ空母」となっているにも、輸送船を沈めても手柄にならないという意識が働く。大軍が上陸しても、補給を断たれば立往生するしかないのだが、「敵の補給を叩くことが近代戦最大の使命」を教えてこなかった。

三川 軍一(みかわ・ぐんいち)

明治21(1888)～昭和56(1981) 海軍中将。昭和17年7月、新設の第8艦隊長官となり第1次ソロモン海戦で勝利。19年南西方面艦隊長官。20年5月予備役編入

……なぜ、突入しなかったのか……

そのまま突入すれば、護衛艦隊を失った輸送船団を撃滅するのは極めて容易だったろう。旗艦鳥海艦橋では、艦長早川幹夫大佐が「長官、反転してもう一遍行きましょう」と叫んだが、

▽この時 輸送船団を撃滅していたら
ガ島戦の様相は 一変していただろう
▽ハワイ真珠湾攻撃の時も 戦艦は壊滅させたが
海軍工廠 石油タンクを攻撃せず 無傷で残した
真珠湾の基地機能を 破壊しておいたら
ミッドウェー海戦の展開も 変わったろうし
米軍の反攻も もっと 遅れていたろう

●参謀本部に「ガ島に米軍上陸」の第一報が入った時

▽この島の名前を 知っている者は いなかったし
海軍が飛行場を作っているもの 初めて知った
▽これが 定説になっているし

佐藤賢了(さとうけんりょう)も

「無人島のような島に、飛行場を建設するぐら
いのことを、陸軍に相談したり通報したりす
る必要も、海軍は感じなかったのか」

▽「遠い島ガダルカナル」(艦-船)によると
軍令部作戦課は 7月7日 参謀本部作戦課に
「ガダルカナル陸上飛行基地は最近造成に着手、
八月末完成の見込」と 文書連絡していた

▽陸軍の関心は もっぱら モレスビー作戦
聞いたこともない島の 飛行場建設など
気にも 留めていなかったのでは…

●日本の占領地に米軍が上陸して来たのは初めてなの

に、陸海軍首脳部の受けとめ方は楽観的だった
▽参謀本部は 海軍から 陸軍部隊派遣を要請され
米軍は せいぜい 2,3千だろうと 判断した

▽ミッドウェー攻略に当たる予定だった
一木支隊(支隊 一木清直大佐)2,200人が
グアムから 宇品に向け 帰途についており
最も迅速に使える兵力として ガ島に派遣

▽日光の御用邸で 避暑中の昭和天皇は
事を重大と見て「すぐ東京へ帰る」

▽永野(永野)は 拝謁して

「米軍の上陸は所謂偵察上陸の範囲と考えられ、
海軍の陸戦隊だけでも撃退し得ると信じます。
ただ放っておくと、敵が固まる危険があります
から、至急陸軍と協力して奪回作戦を行ないま
す。御安心の上御逗留を願います」

誰も返事をしなかったという。

三川は生涯沈黙を守り、弁解すること
はなかったが、赴任の際、永野修身
(永野)から「日本海軍はアメリカの
海軍とは違う。一隻失えば、補充には
何年もかかるのだ」と注意された。三
川とすれば、大戦果は挙げたし、護衛
機のない裸の艦隊 — 敵機の攻撃を
受ける前に、と思ったのだろうか。

早川は「戦闘詳報」に「残弾六割以上
を有し、被害また軽微なりき。よろし
く勇気を揮ひ起し、再び泊地に突入、
輸送船を撃滅すべきものなりと確信
す。同輸送船には、ガダルカナル基地
を強化すべき人員資材を搭載せるは
明らかなり。これを全滅せる場合、敵
国側におよぼすべき心的影響の大なる
べきは、察するに余りあるところ
なり」と記している。

永野 修身(ながの・おさみ)

明治13(1880)～昭和22(1947)高知県生
まれ。海軍大将・元帥。昭和11年広田内
閣海相。12年連合艦隊長官。16年軍令部
総長となり、海軍開戦論の先頭に立つ。
A級戦犯で起訴され、裁判中に病死

佐藤 賢了(さとう・けんりょう)

明治28(1895)～昭和50(1975)石川県生
まれ。陸軍中将。昭和4年から3年間米国
駐在。14年南支方面軍参謀副長、北部仏
印武力進駐を強行。16年軍務課長。17年
軍務局長。19年支那派遣軍参謀副長。A
級戦犯で終身禁固刑。31年出所

一木 清直(いちき・きよなお)

明治25(1892)～昭和17(1942) 陸軍大
佐。支那事変勃発当時、盧溝橋駐屯の第
7師団(剛)歩兵第28連隊大隊長。ガ島戦
で第28連隊を率いて戦死し、死後少将

●「2,3千」の敵情判断に、致命的なミス

▽杉山元(機長)は 12日夜 第17軍に 指導電報
「現状ニ於テハ寧ロ戦機ヲ重視シ、成シ得レハ
一木支隊ト海軍陸戦隊ノミヲ以テ速ニ奪回ス
ルヲ可トセサルヤト考ヘアリ」

▽敵情報告では「輸送船40隻余り」

1隻500人として 2万の大軍と 見なければ…

▽一木支隊は「急げ」というので 駆逐艦でガ島へ
トラック島(輝)に着くと 使える駆逐艦は6隻
詰め込んでも 1隻150人 900人しか運べない

▽地図もなく、渡されたのは ガ島付近の海図
ルンガ岬(新)の ガリ版刷りの略図だけ

▽速射砲 重火器は 駆逐艦では 運べないので
後から 輸送船で運ぶことにして

16日朝 第一陣 歩兵4個中隊916人が
小銃弾250発 食糧7日分 軽機関銃8挺で出発

●一木支隊総攻撃は、一方的な戦闘で終わった

▽18日夜 タイボ岬(輝)から30%に上陸

翌朝 斥候隊(34人)を出したが

米軍は 島民の通報で 待ち伏せ攻撃 31人戦死

▽20日夜 夜襲を執行したが

米軍は テナル川に 戦車 迫撃砲で防衛線

日本軍接近に 照明弾を打ち上げ 一斉射撃

▽戦死800人 捕虜15人 100人ほどがジャングルへ

一木は 翌日午後3時 軍旗を焼き ピストル自決

●一木支隊全滅で、兵力の逐次投入へ

西浦進(輝)は、派兵に反対していた

「補給、増援が難しい絶海の孤島に、ひとたび
陸軍部隊を派遣すれば、ノモンハン事件のよ
うな、将来の見通しもなく、兵力の逐次投入と
いうことにならないか。ことに、軍旗を奉ずる
一木支隊の戦闘加入は、今後の作戦指導を硬
直化させることになるのではないか」

服部(機長)に再考を求め、東条にも「一步後
退して防衛を強化すべきです」と進言したが、
東条は杉山から「状況急を要する」と言われ、
派兵に同意した後だった。

杉山 元(きぎやま・はじめ)

明治13(1880)～昭和20(1945)福岡県生
まれ。陸軍大将・元帥。昭和12年第1次近
衛内閣陸相。15年参謀総長。教育総監を
経て19年小磯内閣陸相に再任。20年第1
総軍司令官。終戦翌月拳銃自殺した。重
要会議を記録した「杉山メモ」を遺す

一木支隊は自信満々だった

一木大佐は第17軍参謀に「ツラギも
うちの部隊で取ってもいいか」兵隊
も「こっちには、九九式の新式銃があ
る。早く行かないと敵が逃げる」

九九式歩兵銃(昭和14年製2599年製)は、
口径を7.7mmと三八式(昭和8年製)より
1.2mm大きくしただけ、原理構造は全
く同じ5発弾倉。米軍は引き金を引く
だけで15発連射のカービン銃。

海兵隊

水陸両用戦車、重砲部隊を持つ米軍
一の精強部隊。兵隊はハンディ・トー
キーで連絡を取り合って常に上陸作
戦の先陣を切り、戦況を切り開いた。

日本は海洋国家だから「海に慣れた
陸軍部隊」があってもよかったが、陸
軍は大陸志向、海軍は艦隊決戦思想。
互いの領域に介入されるのを嫌うか
ら、そうした発想は生まれなかった。
また海兵隊の情報、知識もなかった。

横井 庄一(よこい・しょういち)

大正4(1915)～平成9(1997)愛知県生ま
れ。陸軍伍長。昭和16年再召集され19年
グアム島に転属。8月グアム玉砕で戦死
公報が出て軍曹に昇進したがジャング
ルに潜伏、28年間洞穴内で生き延びた。
47年1月島民に発見され2月2日帰国

軍旗の重み

横井伍長の帰国第一声は「天皇陛下」

▽「帝国陸軍の名誉」に かけてもと

規模の大きい 旅団単位の 川口支隊投入に

▽海軍も 第1次ソロモン海戦勝利に 気をよくし

「米軍上陸は人質をとったようなものだ。この人質ある限り、敵艦隊はガ島周辺をうろつくはずだ」「今度こそ決戦だ」と 意気込んだ

▽しかし 人質をとられたのは 日本の方で

これが 果てしない消耗戦の 始まりだった

●ガ島戦作戦指導は、服部・辻の「ノモンハン・コンビ」

ノモンハン敗戦の責任者

ソ連軍の動員力はケタ違いだった。昭和14年8月20日の総攻撃では、5万7千が戦車500台、装甲車380台を先頭に火砲540門、飛行機500機に援護され襲いかかってきた。日本軍3万に戦車はなく、火砲100門。服部(関東軍機班長)は、「機密作戦日誌」に「私の最も好機に敵が攻勢に転じたものにして、この機会において敵を捕捉し得るものと信じたり」 辻(機班長)も「まさかソ連が、あのような大兵力を、あの草原に展開出来るとは夢にも思わなかった」

情報はあったが無視された。土居明夫大佐(陸大機附武官)は「ソ連は、極東に大機械化部隊を送っている」と警告したが、辻は「ソ連軍戦車を持って来て戦勝祝賀観兵式をやると思っているんだ。余計な事を言うな」

▽参謀本部の中心は 作戦部 中でも 作戦課長は 代々 陸大恩賜の軍刀 作戦畑を歩んだ者だけ

▽昭和15年9月 作戦課長に 土居大佐(機班)

総務部長(機班)が ノモンハンを教訓に

「作戦用兵の基本は、正しい情報把握にある。

それには、作戦部門に情報のエキスパートを」

▽土居の下で 作戦班長になったのが 服部

服部は 辻を戦力班長にと 土居と事毎に対立

▽最後は 土居が 田中新一(機班)に

「服部を出すか俺を出すか、決めてくれ」

田中が選んだのは 服部だった

▽田中 服部 辻 対米開戦強硬派が

参謀本部を 牛耳ることになった

よりお預かりした三八式歩兵銃はちゃんと持って帰りました」だった。銃身には菊の御紋が打たれ、軍人精神高揚のため「軍人の魂」と教えられてきた。ことに軍旗は、天皇から親授された神聖なものであり、軍隊団結のシンボルとされてきた。戦局悪化で、各連隊長は軍旗が敵に奪われないよう、焼却など処理に苦勞したという。

お粗末な物的戦力のままで

ノモンハン事件研究委員会は、報告書で「低水準にある火力戦能力を、速やかに向上させる必要あり」コストがかかり過ぎて日本の国力では出来ない。結局強調されたのは、皇軍伝統の精神威力、白兵戦の銃剣突撃主義。

太平洋戦争中の主力戦車は、九七式中戦車(昭和12年 量産2597輛)だが、歩兵の援護用に作られたので装甲27mmと薄く、昭和16年に対戦車戦用として、一式中戦車(量産50輛、47輛)を採用したが、生産は570台に過ぎなかった。

米軍はチャーマン戦車(量産75輛、75輛)を5万台も生産していた。

田中 新一(たなか・しんいち)

明治26(1893)～昭和51(1976)新潟県生まれ。陸軍中將。ソ連駐在、関東軍参謀。昭和12年陸軍省軍事課長となり盧溝橋事件では拡大派の中心。15年作戦部長。ガ島戦をめぐる船舶増徴問題で東条と対立。第18師団長、ビルマ方面軍参謀長

瀬島 竜三(せま・りゅうぞう)

明治44(1911)～平成19(2007)富山県生まれ。陸軍中佐。昭和14年大本营参謀となり、20年関東軍参謀。シベリアに11年抑留。帰国後伊藤忠に入社し副会長。臨時行政改革推進会議議長を務めた

●辻は、常に積極論で作戦部をリードした

▽開戦直前 第25軍作戦参謀に出て

シンガポールを攻略し 参謀本部作戦班長に

▽井本(帷)は「一言で言えば超人ですわ。非常に個性が強く自負も強い。その上弁舌に優れているから、大抵の場合辻の意志通りに引きずられる」

▽山下奉文(第25軍司令官)は 日記(昭和17年1月3日)に

「辻中佐、第一線ヨリ帰り私見ヲ述べ、色々ノ言アリト云フ。此男、矢張り我意強ク、小才ニ長ジ所謂コスキ男ニシテ、国家ノ大ヲナスニ足ラザル小人ナリ。使用上注意スベキ男也」

「高松宮日記」(昭和17年4月8日)

新聞ニ馬來作戦ノ記事、辻作戦主任参謀ノ記スル処ト思ハレルモノニ頁ニワタリ出タリ。中ニ作戦主任ガ独リデ作戦ヲキリ廻ス、司令官等ハ「ロボット」ナリト云ハヌバカリノ書き振りナリ… 自分ノ手柄話デアリ、一般ノ人気取りデアル。

●参謀本部は、一木支隊全滅後も米軍を甘く見ていた

▽川口清健少将の第35旅団 4,000人を送ることに

▽8月下旬 ラバウル航空隊の 使用可能機は52機

制空権は 飛行場を握った 米軍の手に

一木支隊第2陣も ガ島に 近付けない

▽8月24日 第2次ソロモン海戦

空母エンタープライズを 大破させたものの

小型空母龍驤(10,000t)が沈没

▽アメリカ側は レーダー装備の 艦艇を配備

日本海軍伝統の 夜戦が通用しなくなり

制海権も 次第に 奪われていった

●連合艦隊は8月25日、駆逐艦夜間輸送に切り替えた

▽駆逐艦が ショートランド島に待機

夜間 480kmを突っ走り ガ島に増援 補給

▽食糧など詰めた ドラム缶100個を 麻縄でつなぎ

駆逐艦の 両舷側に吊し 海岸近くで投げ入れる

兵隊が泳いできて 大急ぎで ジャングル内に

▽必死で運んだ 食糧 弾薬も 一夜明けると

米軍機に焼き払われ 必要量の 三分の一以下

— 瀬島竜三さん(隼鷹)の回想 —

「田中中将は外柔内剛、威風凜凜、高い見識と決断力を備え、それでいて周到な細心さを持った將軍だった。決して弱音を吐かず、ほとんどすべての面で強気の考え方で、部下にとって、頼もしい上司だった。服部大佐は外柔内剛、辻中佐は外剛内剛。…この三人の先輩が、実質的に作戦部全体の方向、陸軍全体の方針に直接関与した。歴史を振り返ると、この時期における最高統帥部の人事配置については、三思させられるものがある」
(幾山河)

山下 奉文(やました・ともゆき)

明治18(1885)～昭和21(1946)高知県生まれ。陸軍大将。航空總監などを経て昭和16年第25軍司令官となりシンガポールを攻略。19年第14方面軍(比島)司令官。戦後「マニラ虐殺」の責任で処刑された

高松宮 宣仁親王(たかまつのみや・のぶひと)

明治38(1905)～昭和62(1987)大正天皇の第3皇子。海軍大佐。戦争中、軍令部参謀、砲術学校教頭。戦後は国際文化振興会総裁など。海兵在学中、大正10年から書き続けられた「高松宮日記」(20冊)

川口 清健(かわぐち・きよたけ)

明治25(1892)～昭和36(1961)高知県生まれ。陸軍少将。昭和16年12月第35旅団長として英領ボルネオ攻略に当たり、17年4月セブ島(比島)攻略後、ガ島に転戦した。戦後、比島の戦犯裁判で禁固6年

……「東京急行」「鼠輸送」……

米軍側は、每晚同時刻に同じ場所を走る急行列車のように、「トウキョウ・エクスプレス」(鼠輸送)と呼んだ。駆逐艦は本来は、高速で水雷攻撃に……

- ▽駆逐艦で運べるのは 軍需品100ト 兵隊150人
輸送船の 五分の一にも ならない
- ▽最後は「海底トラック」潜水艦の魚雷発射管に
袋詰め of 食糧を 積み込み 海岸目がけて発射
- ▽補給の限界は もう「鼠輸送」になった時点で

●川口支隊主力、一木支隊第2陣は8月31日深夜、駆逐艦輸送でタイボ岬に上陸した

- ▽激しいスコールが 幸いたが
大型発動艇(アムゼ)60隻の 別動隊1,000人は
米軍機の攻撃で 20隻が沈められ
エスperans岬(鵜飼岬)に 上陸したのは450人
- ▽川口支隊総攻撃は 9月13日夜
飛行場南側の 丘から始まった
- ▽撃たれても 撃たれても 突進してくる日本兵に
米軍の戦線は 混乱に陥り 逃げ出す隊員も
- ▽隊長(エドワズ)は 胸ぐらを掴み 手榴弾を握らせ
「死にたいのか。生きたかったら、
こいつを奴らに叩きつけるんだ」
- ▽日本兵が 何度か 突破しても
その都度 圧倒的な火力に 撃退された
- ▽米軍が「血染めの丘」を 守り通せたのは
迫撃砲1門で 2千発も 撃ち続けた結果だった
- ▽川口支隊は 半数を失って ジャングルに退却
兵隊は「あの朝、もう二つお握りがあったら」
「味方にもう一個連隊あったら、
飛行場は取れたのに」と 悔しがった

— 参謀本部の「兵力小出し」のミス —
福留繁海軍中将(勲四)は、戦後、米海軍首脳から「ガ島戦で重大な危機があった。もし日本軍が二回目の攻撃(加藤)の時、第三回目(10月24日第2陣攻撃)だけの兵力を出していたら、米軍は敗退していたろう」と、打ち明けられた。

- ▽9月18日 増援の第7海兵連隊 4,000人が
食糧 弾薬をたっぷり持参 米軍士気は上がった

●第17軍に、第2師団(船)第38師団(結屋)を増強

- ▽作戦指導参謀として 辻中佐を派遣
「拙速主義」を改め 10月下旬を期して総攻撃

当たるのが任務。駆逐艦乗りは、闇夜に紛れて猫の目を盗む鼠にたとえて半ば自嘲気味に、「鼠輸送」とか、国際通運(通輸)が昭和10年から鉄道省とタイアップして行なっていた宅配輸送にたとえ、「丸通」と言っていた。

— 日本兵の姿を見て… —

ジャングル内から一木支隊、設営隊の生き残りが、ボロボロの軍服、青ざめた顔、はだして出て来て、両手を差し出し「何か、食べるものを」
背負っていた米を与えた兵隊も、まさか、同じ運命が、すぐ自分たちを見舞おうとは思ってもいなかった。

…… 海兵隊も疲労の極に達していた ……

輸送が思うようにいかず、上陸以来38日間も補給を受けていなかった。
日本陸軍は「敵さん給与」と言って、食糧は敵軍から奪うのを常識にしていたが、米軍を食いつながせたのが、設営隊員の残していった米だった。
それでも1日2食がぎりぎり、マラリアが増え、体力も気力も衰えていた。

福留 繁(ふくどめ・しげる)

明治31(1898)～昭和46(1971)鳥取県生まれ。海軍中将。昭和14年連合艦隊参謀長。16年軍令部作戦部長。18年連合艦隊参謀長。19年搭乗機がセブ島で不時着、ゲリラの捕虜となり陸軍部隊に救出される。第2航空艦隊長官など歴任

— 「ただ前進あるのみ」の辻 —

高山信武中佐(勲四)が「ガ島は一つの前進基地に過ぎない。その攻防に捉われ過ぎ、戦力の消耗、時間の空費をすべきでない。この際ガ島を放棄、ラバウルを中心としたピスマルク諸

▽作戦計画では 歩兵1万7,500人 火砲160門
糧食30日分を ガ島に送り 10月20日頃総攻撃
▽重火器 食糧を運ぶには 大輸送船団が必要
辻は 連合艦隊司令部(トラック島)に 乗り込み
山本五十六(監)と直談判 承諾を取り付けた

●第2師団は、10月1日から駆逐艦輸送によりガ島上陸

▽師団司令部に呼ばれた 川口(少将)は
戦力貧困 特に飢えと疲労 地形の険しさ
敵戦力の強大を 縷々 説明したが
「消極的だ」と 司令部の反感を 買うことに

— ガ島の飢えは、日々進行していた —

10月9日、ガ島に上陸した百武(副師長)は、初めて見る惨状に驚いた。川口支隊は26日間、一木支隊に至っては49日間も満足に食べていないのだ。トカゲは一番のご馳走で、日本軍の行動範囲から姿を消し、清流にも小魚の影はない。たまにありつくマッチ箱一杯ほどのお米は、米粒を少しでも長くしようと蠟燭の火でゆっくりゆっくり重湯にし、2ヶ月にも3ヶ月にもする。

百武はラバウルの参謀長に「川口支隊は餓死に瀕しつつあり。人員輸送を中止し、糧秣及び飛行場制圧用弾薬のみ急送すべし」と命じた。

▽重火器 食糧輸送は 10月15日 高速輸送船6隻で

▽連合艦隊は それに先立ち 13日夜

艦砲射撃で 飛行場を制圧しようと
金剛 榛名の「戦艦の殴り込み」をかけた
1時間10分 14吋砲弾918発を 撃ち込んだ

— 破壊力は「野砲千門に匹敵」 —

「三式弾」と呼ばれる新兵器で、爆発すると親指大の焼夷弾1,000個が、ホウキ星のように飛び散り、ガソリン、弾薬に引火し飛行場は火の海に包まれた。飛行機90機のうち48機を破壊、滑走路も一時使用不能になった。

▽米軍の飛行場修復力は 驚異的だった

▽輸送船団は 15日朝 揚陸中に爆撃され

1隻沈没 3隻が炎上し 揚陸出来たのは
食糧10日分 火砲38門(砲2門) 砲弾も1門200発

島の防衛強化を図るべきだ」

辻は「今や戦機だ。ガ島を敵に委したら、敵に勢いを与えることになる。わが精鋭たる皇軍の精神威力の向かうところ、何の恐れることがあろう。貴様に忠告するが、参謀たる者、絶対弱音を吐いたらいかん。退却などという言葉は、絶対に口に出すな」

高山は「開戦以来敗戦を知らない作戦部では、強硬論者は勇者、慎重論者は卑怯者のような印象を与えた」

高山 信武(たかやま・しのぶ)

明治39(1906)～昭和62(1987) 陸軍中佐。昭和15年独伊軍事視察団員。16年参謀本部作戦課参謀となり、戦力班長。戦後自衛隊陸将。統合幕僚会議事務局長、北部方面総監を歴任

「高松宮日記」

(11月28日) 陸軍辻中佐ハ初メカラノ関係上、二～三ヶ師団ハツブシテモヤルト云ツテキル (12月16日) 辻中佐コノ頃「カンカン」ニナツテキテ話ニナラズ。「ガ」島ヲヤルト云フノミデ静思スル余カナキ様ナ形ナリ。大丈夫ヤレルトノミデ、ホントニヤレル工夫ヲシナイ様ダ

山本 五十六(やまもと・いそく)

明治17(1884)～昭和18(1943)新潟県生まれ。海軍大将。駐米武官、赤城艦長、航空本部長を歴任し、昭和11年海軍次官。14年連合艦隊長官となり真珠湾攻撃を立案、実行。前線基地視察中ソロモン諸島上空で撃墜され戦死。死後元帥。国葬

…… 宝の出し惜しみ ……
…… 淵田美津雄中佐(縣敵艦隊艦長)が連合艦隊参謀に「なぜ、もっと威力の大きい18吋砲の大和、16吋砲の長門を使 ……

米軍は万全の迎撃態勢

火炮180門、それが1門で1日2,000発以上も撃ち込んでくる。鉄条網を張った陣地前に、感度のいいマイクロフォンを埋設、日本兵が通ると砲兵信号所にポンと信号があがり、すぐそこに砲火を集中してきた。ジャングル内の木に時限小銃弾を吊して10分間隔で炸裂させ、応戦した小銃音で日本兵の所在を掴んだ。

●第2師団は、22日夜襲攻撃の予定で

- ▽ジャングル突破の 前進を開始したが 難航した
- ▽工兵隊が切り開いた 幅5、60呎の小道を
砲弾1発ずつを持ち 一列縦隊で
- ▽密林に迷い 行きつ戻りつするうちに
疲労が重なっていった 糧食5日分に
大砲 重機関銃も 分解して背負っていた
- ▽重さに耐えかね 砲弾が捨てられ
マラリア熱で 木の根元に 横たわる兵隊が
- ▽攻撃の足並みが揃わず 総攻撃は24日に

●総攻撃は豪雨の中、10月24日夕から始まった

- ▽第一線を突破しても 第二 第三の堅塁に阻まれ
圧倒的な砲火に 損害が 続出した
伏せて 頭を上げようとする
頭上30呎は 機関銃弾の弾幕だった
- ▽左翼隊歩兵第29連隊は 敵陣を突破したものの
逆に包囲され 連隊長・古宮政次郎大佐は自決
- ▽那須弓雄少将(左翼隊長)は 40度を超える熱
25日夜 軍刀で体を支え 再度 突撃の先頭に
指揮官が 相次いで倒れ
2千人余りの死体を残し ジャングルに後退
- ▽那須も 胸に銃弾を受け 丸山政男師団長に
何か言いたげに 口を開きかけ 事切れた
- ▽百武(副師長)は 26日午前6時「攻撃中止」を命令
第3回総攻撃も 失敗に終わった

●26日には南太平洋海戦

- ▽空母ホーネット撃沈 エンタープライズを大破
日本側は 翔鶴小破 小型空母瑞鳳中破

わないんだ」 参謀は声をひそめ「実は燃料が足りないのだから」大型戦艦を動かすには燃料不足の悩みが出ていたのだが、ガ島奪回の成否は、一に飛行場制圧にかかっていたのだから連合艦隊の総力を結集すべきだった。

結局は「大和、長門は艦隊決戦主力」の考えが、温存させることになる。大和は18吋砲の威力をほとんど発揮することもなく、沖縄特攻作戦で沈む。

淵田 美津雄(ふちだ・みつお)

明治35(1902)～昭和51(1976)奈良県生まれ。海軍大佐。昭和16年赤城飛行隊長となり、真珠湾攻撃隊総隊長。19年連合艦隊航空首席参謀。戦後、26年に洗礼を受け全米47州を伝導して回る。著に「真珠湾作戦の真相」「ミッドウェー」

川口右翼攻撃隊長の敵前解任

指示された攻撃正面は、多くの損害を出した「血染めの丘」だった。「丘を右に回り、草原地帯からの攻撃」を具申したが、方針は変わらなかった。23日午後、再考を求めた川口に、師団司令部からの電話は「閣下は、右翼隊長を免ぜられました」という解任通告。臆病風に吹かれたと見られたのだ。

古宮連隊長の遺書

多くの将兵を無駄死させ、かかる結果を招きたることは慚愧にたえず。吾人は火力を軽視すべからず。火力十分なれば兵の行動は果敢となり、その気力また充実するも、火力不足すれば消極的ならざるを得ず。魂は万古不滅なり。数日間疲労激しく、眠たし。本日、天命を終うるにあたり悔いなし。

▽大本营は 27日夜 軍艦行進曲の鳴り物入りで
「空母4隻 戦艦1隻 艦型未詳1隻撃沈」と発表
▽嘘の発表というより 誤認の誇大戦果だったが
参謀本部は 第2師団敗戦の 当て付けととった
▽実際は 未帰還69機 不時着水23機
多くの歴戦パイロットが 還ってこなかった
▽物だけでなく 人の面でも 後が続かない
国力の浅さが 表面に出てきた

●米機動部隊はしばらくは動けないだろうと、第38師団は予定通り投入することになった

▽輸送船11隻が 11月12日出発
4日間にわたる 第3次ソロモン海戦となった
▽軽巡2隻 駆逐艦7隻撃沈 戦艦1隻を大破したが
初めて 戦艦比叡 霧島が撃沈され
連合艦隊は これ以後
ガ島に 大兵力を投入することは なかった
▽内地在庫の石油が 100万トに減っていて
大作戦が 不可能になっていた
▽制海権も 完全に 米軍に奪われ
14日に ガ島に辿り着いた 輸送船は4隻
▽2千人が上陸したが 軍需品は
翌朝の爆撃で 焼き払われ 丸裸同然の上陸

●ガ島の陸軍兵力は、数字の上では3万だが…

▽戦闘に耐えられる者は 4千人余り
動けない者が 陣地の守備
杖を頼りに動ける者は 食糧運搬や炊事
杖なしで動ける者が 斥候や斬込隊に
▽ほとんどが マラリア アミーバ赤痢に冒され
全将兵が 急速に 飢えていった
▽陸軍は まだ「断固奪回」の姿勢を 見せていた
11月16日 第8方面軍を新設
軍司令官に 今村均中将を任命
第17軍(ガダルカナル) 第18軍(ニューギニア)を指揮させた

●「人命より面子」 — 驚くべき戦争指導の空白

▽内心では「撤退」しかないと 思っている
自分の方からは 言い出したくない
陸海軍の 意地と面子の 張り合いがあった

参謀本部「機密戦争日誌」

「ソロモン方面陸軍戦況全く頓挫せり。然るところ海軍作戦は意想外進展しありて同慶に堪えず。第一部長(磯田)開戦以来未だ曾てなき屈辱を感ずと述懐せらる」

「米軍ガ島上陸」発表は11月14日

海戦、航空戦の華々しい戦果発表はあったが、地上戦の形勢が悪いため、陸軍は沈黙していた。この日第3次ソロモン海戦の発表に合わせて陸軍報道部長・谷萩那華雄大佐(やなぎ・なかも)の談話の形で、初めて明らかにした。

「我が海軍部隊が僅少なる兵力をもって占拠しあったガダルカナル島およびその付近に本年八月米軍部隊が大挙上陸した。こゝにおいて我が陸軍部隊は海軍と緊密なる協同の下に数次に互り極めて困難なる上陸を敢行した。すでに数次に互り発表せられたソロモン方面諸海戦も実はこの陸戦と相関連して惹起せられたものである」

新聞には「ガダルカナル島で進撃する我が〇〇部隊」こんな説明のついた写真が「陸軍省検閲済」のマーク入りで掲載されたが、すでに壊滅した一木支隊を撮影したものだ。

今村 均(いむら・ひとし)

明治19(1886)～昭和43(1968)宮城県生まれ。陸軍大将。陸軍省兵務局長、第5師団長を歴て昭和16年第16軍司令官としてジャワ攻略。17年11月第8方面軍司令官。戦後、豪州戦犯裁判で禁固10年の刑を受けると、志願してマヌス島に渡り、部下と一緒に服役した。29年仮釈放。庭に3畳ほどの小屋を建て、謹慎の生活を送った。著に「一軍人六十年の哀歓」

宇垣纏(連合艦隊参謀長)は日記に(昭和17年12月8日)

○ガ島問題の発端は海軍側の不用心にあり
○第一回、第二回、第三回と随分と陸軍を引張り出した。或時は誘い、或時は押し、或時は責任を負はずやら仕向け来たり。三回の失敗は勿論陸軍に其責あるも、又輸送補給を完了し得ざる海軍に責あり

○ガ島の奪回を廻りては艦隊は屢次の戦果偉功を奏せり。然るに現地に対する補給輸送は常に其目的の半を達せず、ガ島は結局「餓島」なりの悲鳴を挙げしむる程の惨状を来せり。要するに艦隊は陸軍を種にし、囷として自隊のみの目的を計るものなりと、坐視の間をするの士をして懷疑せしめ僻目に陥らしめたり
○艦隊側より不能論を持ちかくる事は行き掛懸り上不可なり。撤退論にせよ、無理押しは絶対禁物にして、自然的に彼等が已むなきを自解せしむる事肝要なり

●撤退へ動かさせたのは、輸送船の壊滅的打撃

- ▽ガ島に 新兵力・軍需品を送るには 船舶70万ト
- 参謀本部は 37万ト増徴を 申し入れたが
- 陸軍省軍務局は「鉄鋼生産に影響」と反対した
- ▽臨時閣議は 12月5日夜 16万ト増徴しか認めず
- 18年4月以降 陸軍に 18万トの徴用解除を要求
- この数字は「ガ島戦中止」を 意味した
- ▽佐藤(参謀長)は 田中(機務長)に 呼び出され
- 「いきなり殴られたので、殴り返した」
- ▽田中は 6日夜 東条首相に 再考を迫った
- 「今ガ島で撤退したら、南太平洋は総崩れです。
- 弱気でガ島を捨てたら、一年後はどうなるか」
- ▽東条は譲らず 最後は 田中が
- 「それでも貴公は陸軍大臣か。この馬鹿野郎！」
- ▽田中は 7日 重謹慎15日を 言い渡され
- 作戦部長も 綾部橘樹少将と代わった
- ▽10日の 大本営政府連絡会議では
- 「撤退問題」は まだ 議題にもなっていない
- ▽杉山(参謀長)は 会議に 参考資料として
- 「ガダルカナル島攻略作戦ノ必要性」を提出

宇垣 纏(うがき・まとも)

明治23(1890)～昭和20(1945)岡山県生まれ。海軍中将。昭和16年連合艦隊参謀長。20年第5航空艦隊長官となり沖縄特攻作戦を指揮。終戦当日、自ら特攻出撃して戦死した。遺稿に「戦藻録」

船舶増徴問題

船舶が陸海軍に徴用されたため、国内生産力に影響が出始めていた。鉄鋼生産は17年度427万トが18年度300万トに落ち込むことが予想された。10月22日、陸海軍、企画院の協議の結果、徴用船舶の解除以外にないと、海軍は即時9万ト、陸軍もガ島戦一段落後、13万トを解除することになり、東条首相も「このまま行けば、国家は破産状態になる」と言っていた。

ガ島戦継続の参謀本部と、生産力重視の政府、陸軍省との対立になった。

綾部 橘樹(あべ・きつじゅ)

明治27(1894)～昭和55(1980)大分県生まれ。陸軍中将。関東軍参謀副長、第1方面軍参謀長を経て昭和17年12月参謀本部作戦部長。18年南方総軍参謀副長

杉山の「ガ島作戦必要論」

〈ガダルカナル〉島ヲ攻略シ〈ソロモン作戦〉ヲ完遂スルニ於テハ、米豪ノ連絡ヲ遮断スルノ利アルニ止マラズ、消極的防衛ノ見地ヨリスルモ、米
国最大ノ反攻路タル南太平洋方面ニ於ケル唯一最重要防衛作戦基地タル〈ラバウル〉ヲ安全ニ確保スル為ニ絶対必要トス…而モ〈ガダルカナル〉島ニハ既ニ軍司令官以下三万ノ皇軍上陸シアリテ、之ヲ撤退セシムル事ハ、攻略スルヨリモ更ニ困難ナル現況ニアルニ於テ特ニ然リトス。

▽参謀本部は「これだけの兵力撤退には船も必要だし、制空権、制海権のない中で行なうのは至難の業だ。それなら、その兵力はそのまま残して持久戦態勢をとらせた方がいい」

●作戦課長が、服部から真田穰一郎大佐に(12月14日)

▽真田は19日 ラバウルに飛び 現地の意見を聞いた 誰も「撤退」を 口にはしないが

攻撃に 確信を持っていないことは わかった

▽同行の瀬島少佐が

「今や大本営の責任において決定すべきです」

真田は「全く同感です。それで行きましょう」

▽真田は 25日夜帰京 杉山(鐵齋)に報告し

「撤退」の方針は 決まったが

27日から 陸海軍作戦課合同の 図上演習

まず「奪回不能」の判定を出し

その上で 奪回作戦の検討に 入ることに

▽前線は飢えているのに 何という意志決定の遅さ

●ガ島撤退は、12月31日の御前会議で決定した

▽宮中の新年行事を考慮し 1月4日を予定したが

昭和天皇は「第一線のことを考えれば

年末も年始もない」急遽 異例の大晦日の会議

▽昭和18年1月4日 大本営は 正式に撤退命令

捲土重来を期して「ケ号作戦」

●撤退作戦は、2月1日から7日まで3回に分けて

▽高速輸送船主体で 人員収容を優先し

「兵器は放棄してもよい」とされた

▽全て 20隻の駆逐艦に 代わったのは

山本(齡齋)の「輸送船では犠牲が多くなる。

動ける駆逐艦は全て投入する」の 強い決意から

▽空も海も 米軍の制圧下 撤収は よくて5千人

駆逐艦も 半数は失うだろうと 見ていたが…

●撤収は奇跡的に成功、陸軍9,800人、海軍830人を収容

▽ラバウル航空隊が ガ島を反復攻撃

第2 第3艦隊も 陽動作戦をとったため

米軍は 日本軍の新たな攻勢を 警戒して

「ガ島撤収」に気付いたのは 2月9日だった

真田 穰一郎(さだ・じょういちろう)

明治30(1897)～昭和32(1957) 北海道生まれ。陸軍少将。陸軍省軍務課長を経て昭和17年12月参謀本部作戦課長となり18年作戦部長。軍務局長など歴任

— 百武(嗣館)からは悲痛な電報 —

(12月23日)糧食皆無ニシテ、モハヤ一兵ノ斥候モ出セズ。敵ノ攻勢ニ対シテハ全ク処置ナシ。第十七軍ハ餓死センヨリハ、ムシロ全員敵陣地ニ斬リ込ミ、玉碎ヲ希望シアリ。御許シヲ乞ウ。

— 小尾靖夫少尉の日記 —

川口支隊第124連隊の連隊旗手としてアウステン山に籠城した小尾は、12月27日の日記に、こう記している。

この頃、アウステン山に不思議な生命判断が流行り出した。限界に近づいた肉体の生命の日数を、統計の結果から、次のように別けたのである。

この非科学的であり、非人道的である生命判断は決して外れなかった。

立つ事の出来る人間は 寿命は30日
身体を起して坐れる人間は 3週間
寝たきり起きれない人間は 1週間
寝たまま小便をするものは 3日間
もの言はなくなったものは 2日間
またたきしなくなったものは 明日
噫、人生僅か50年といふ言葉があるのに、俺は齢僅かに22歳で終るのであろうか。

— 撤収最終日の7日は —

最後の駆逐艦が将兵を乗せた後も、岸辺周辺をぐるぐる回り、「誰かいるか、まだ乗る者はないか」と大声で連呼した。ブーゲンビル島に着くと、迎える者、迎えられる者、みんなただ泣いた。重症患者を運ぶ氷川丸(鯨船)の上甲板には、1日20回も30回も便所に

▽2月10日夜 百武(軍令官)が 思い詰めた表情で
今村(第8師団軍令官)を訪ねてきた
「部下の三分の二を失い、
敗戦の責任をとることを、お認め願います」

▽今村は「お気持ちはわかりますし、
止めはしません。ただその時期につき、
私の考えを申しておきます」

胸を打つ今村の言葉

一つは、ガ島で戦死した、とくに餓死した1万数千の英霊のため、どうしてこんなに悲惨なことになったのか、その顛末を詳しく記録し、後世の反省に役立たせなければ、英霊は行くべき所に行かれませんか。その記録を残さない自決は、部下に対する義務を欠きます。

二つは、ガ島の敗戦は戦いによったものではなく、飢餓の自滅だったのです。この飢えはあなたが作ったものですか？ そうではありません。全くわが軍中央部の過誤によったものです。これは、補給とは関連なしに、戦略戦術だけを研究し、教育してきた陸軍多年の弊風が累をなし、すでに制空権を失いかけている時期に、祖国からこんなに離れた小島に3万からの第17軍を注ぎ込む過失を、中央は犯したのです。

あなたの記録は、国軍戦略戦術の研究態度矯正にきっと役立ちます。また、ガ島で倒れた将兵のご遺族に、戦死の日と場所、その働きを知らせることは、あなたの責任です。

▽百武は 涙を流し「時期は熟考する」と約束した

▽今村の言葉には「ガダルカナルの敗因」の全て
しかし 陸軍は「敗軍の将」の言葉には

耳を貸さず 各地で 同じ過ちを繰り返した

▽ガ島戦は 太平洋戦争の折り返し点

これ以後 日本が 主導権を握ることはなかった

通う下痢患者のために臨時の便所が
並んで設けられた。白衣の兵士が、杖
にすがり、よろめきつつ往復したが、
誰一人、ものを言う者はいなかった。
喋る気力も失われていたのだ。

今村(第8師団軍令官)が10日、急造のテ
ントに足を踏み入れた瞬間、思わず息
を呑んだ。細い首、枯れ木のような手
足の兵士が、影のように座っていた。
まさに「生ける屍」だった。

ガ島戦の犠牲

◆陸軍 投入兵力 3万3,600人

戦死8,200人 戦病死1万1,000人

◆海軍 艦艇24隻 13万4,839ト

航空機893機 搭乗員2,362人

◆米軍 戦死1,598人 戦傷4,709人

艦艇24隻 12万6,240ト

ガ島海域の入り口サボ島沖では、多
くの海戦が行なわれ日米海軍共に24
隻の艦艇が沈んだが、米海軍は軍艦
の墓場として「アイアン・ボトム」「鉄
底海峡」と呼んだ。

「ガダルカナル」 関係年表

昭和 6	1931	9. 18 柳条湖で満鉄爆破。満州事変始まる	昭和17	1942	8. 18 一木支隊第一陣916人、タイポ岬上陸
12	1937	7. 7 盧溝橋事件勃発。支那事変始まる			8. 19 斥候隊34人、待ち伏せされ31人戦死
14	1939	5. 11 ノモンハン事件始まる			8. 20 一木支隊、夜襲で第1次総攻撃米軍、ガ島飛行場に31機進出、使用開始
		8. 20 ソ連軍大攻勢。関東軍壊滅的打撃			8. 21 一木清直大佐、軍旗を焼き自決
		9. 1 第2次世界大戦始まる			8. 24 第2次ソロモン海戦。空母龍驤沈没
15	1940	7. 24 海軍、零式戦闘機(ゼロ戦)制式採用			8. 25 連合艦隊、船団輸送を中止し、駆逐艦による夜間「鼠輸送」に切り替え
		9. 27 日独伊三国同盟、ベルリンで調印			8. 31 川口支隊・一木支隊の第二陣、駆逐艦輸送によりタイポ岬上陸
16	1941	9. 28 参謀本部作戦課長に土居明夫大佐			9. 13 川口支隊、ガ島飛行場の夜襲に失敗
		4. 13 日ソ中立条約、モスクワで調印			9. 18 米4千人の増援海兵隊、ガ島に到着
		6. 22 独軍、ソ連に侵攻。独ソ戦始まる			10. 1 第2師団、駆逐艦輸送でガ島上陸開始
		7. 1 参謀本部作戦課長に服部卓四郎中佐			10. 9 第17軍司令部、ガ島西北岸に上陸
		7. 28 日本軍、南部仏印に進駐開始			10. 11 サボ島沖夜戦。レーダー装備の米艦隊と交戦し敗れる
		8. 1 米、対日石油輸出を全面禁止			10. 13 戦艦金剛、榛名、ガ島飛行場艦砲射撃
		10. 18 東条英機内閣発足			10. 15 輸送船団、爆撃で火砲、糧食大被害
		11. 26 米國務長官、「ハル・ノート」手交			10. 22 民需船舶不足で一部徴用解除決定
		12. 1 御前会議、対米英蘭開戦を決定			10. 23 右翼攻撃隊長の川口清健少将解任
		12. 8 太平洋戦争始まる。真珠湾攻撃			10. 24 第2師団、第3次総攻撃
		12. 10 マレー沖海戦◆グアム島攻略			10. 26 南太平洋海戦◆百武、攻撃中止を命令
		12. 12 閣議「大東亜戦争」の呼称決定			11. 10 第38師団司令部、ガ島に上陸
		12. 16 戦艦大和(69, 100ト)竣工			11. 12 第3次ソロモン海戦。比叻、霧島沈没
		12. 23 ウエーク島占領			11. 15 第38師団の輸送船団11隻壊滅的被害
		12. 25 香港占領			11. 16 第8方面軍(今村均中将)新設
17	1942	1. 2 マニラ占領			11. 24 駆逐艦に代え潜水艦による糧食輸送
		1. 23 ニューブリテン島ラバウル占領			12. 5 臨時閣議、参謀本部の船舶37万ト増徴要求を蹴り16万トに
		2. 15 シンガポール占領			12. 6 田中新一陸軍作戦部長、東条首相に船舶増徴を迫り「馬鹿野郎」
		3. 7 大本営政府連絡会議、米英の大規模攻勢の時機は「18年以降」と予測			12. 7 田中更迭、後任作戦部長に綾部橘樹
		3. 8 ラエ、サラモア(ニューギニア)に上陸			12. 14 服部作戦課長に代え真田穰一郎大佐
		4. 1 ラバウルに海軍第25航空戦隊進出			12. 19 真田、ラバウルに飛びガ島撤収決意
		4. 11 ソロモン諸島ブーゲンビル島攻略			12. 25 真田帰京、杉山元参謀総長に報告
		4. 18 米B25爆撃機16機、東京など空襲			12. 27 陸海軍作戦課台同のガ島図上演習
		5. 3 海軍陸戦隊、ツラギ島占領			12. 31 大本営御前会議、「ガ島撤退」決定
		5. 5 大本営、ミッドウェー攻略を命令			18 1943
		5. 7 珊瑚海海戦			1. 4 ガ島撤退の「ケ号作戦」下令
		5. 18 大本営、フィジー・サモア作戦を発令。第17軍(百武晴吉中将)編成			2. 1 ガ島からブーゲンビルへ第1次撤退
		6. 5 ミッドウェー海戦。主力空母4隻喪失			2. 4 ガ島第2次撤退
		7. 1 空母翔鶴、瑞鶴を中心に第3艦隊新設			2. 7 ガ島撤退完了。10, 630人を収容
		7. 2 米統合幕僚長会議「望楼作戦」決定			2. 9 大本営「ガダルカナル転進」と発表
		7. 6 ガ島に設営隊、陸戦隊上陸			10. 20 作戦課長に再び服部大佐
		7. 7 海軍、陸軍に「ガ島飛行場8月末完成」			19 1944
		7. 10 ニミッツ、ガ島・ツラギ攻略を命令			2. 20 ラバウル航空隊、ラバウル引き揚げ
		7. 11 大本営、第17軍にポートモレスビー陸路攻略下令(辻政信参謀の独断)			7. 7 サイパン島守備隊、最後の突撃、玉砕
		7. 14 海軍、南東方面担当の第8艦隊新設			7. 18 東条内閣総辞職(小磯国昭内閣成立)
		7. 21 南海支隊先遣隊ブナ(ニューギニア)上陸			8. 11 グアム島の日本軍玉砕
		8. 5 ガ島飛行場完成、航空機進出を要請			20 1945
		8. 7 米第1海兵師団、ガ島、ツラギに上陸			4. 1 米軍、沖縄本島に上陸
		8. 8 第1次ソロモン海戦。第8艦隊は米・豪重巡4隻撃沈、1隻を大破			4. 7 戦艦大和、南九州沖で撃沈される
		8. 10 大本営、ガ島に一木支隊派遣を決定			8. 15 敗戦
			47	1972	2. 2 横井庄一伍長、グアムより帰国